

## 〔研究ノート〕

### 芥川旧蔵書から（２）芥川龍之介の洋書に貼付された書店票

澤西祐典

日本近代文学館・山梨県立近代文学館・神奈川近代文学館に見られる芥川龍之介の旧蔵書・洋書全 844 冊<sup>1</sup> に貼られている書店票（書店名が記されたラベル）について悉皆調査を終えたので、簡単な報告をまとめる。書店票は全 844 冊中、553 冊<sup>2</sup>にて確認された。そのほとんどが、図書の表見返し・左上隅に貼られていた。中には同一図書に 2 枚のラベルが貼られているケース（例えば、丸善書店のラベルの上から、岩波書店のラベルが貼られている等）もあったが、ごく少数であった。

もっとも数の多かったのは、丸善書店のラベルで、総数 443 点にのぼる。次に多い中西屋書店が 59 点、その次に多い教明社は 11 点、郁文堂 9 点と続く。それらと比較しても、芥川が丸善書店を重宝していたかがわかる。「歯車」や「田畑日記」など、たびたび名前が登場していることから、さほど驚くことではな

---

<sup>1</sup> 全 844 冊の内訳・詳細については拙著『芥川龍之介における海外文学受容—旧蔵書越しに見える風景—』（ひつじ書房、2025・3）に詳しく報告しているが、日本近代文学館 819 冊、山梨県立文学館 20 冊、神奈川近代文学館 5 冊を対象とした。拙著には、巻末付録として著者・書名・書き込みの有無などについて一覧を載せているので参照されたい。

<sup>2</sup> 日本近代文学館に芥川文庫として保管されている Abbé 著 *Legends of Saint Joseph, patron of the universal church*（請求記号 A1, New York, P. J. Kenedy, 1896）のみ、「星書店（京都）」のスタンプが押されていて、厳密には書店「シール」ではないが、便宜的にこの 1 点も数に含めた。

いが、今回の悉皆調査でその実態が実数として裏付けられたといえるだろう。

844 冊の芥川旧蔵書中 443 点が確認できた丸善の書店票について、もうすこし詳しく報告する。確認・分類できた範囲で、芥川旧蔵書に貼付された丸善書店票は全 14 種類にのぼる。丸善の支店名の数に応じて全 14 種類を分類すると、大きく 4 つのカテゴリーに分類できる。店舗について東京のみに言及しているものを〈丸善 1〉、東京・大阪に言及しているものを〈丸善 2〉、東京・大阪・京都が印字されているものを〈丸善 3〉、東京・大阪・京都・福岡のものを〈丸善 4〉と便宜的に呼ぶことにする。この分類に応じた総数は〈丸善 1〉は 214 点、〈丸善 2〉は 23 点、〈丸善 3〉は 126 点、〈丸善 4〉は 84 点となる<sup>3</sup>。

〈丸善 1〉は赤と白で「MARUYA」と表記され、美しいあしらいが施されたもの（図 1）と、文字だけが印字されたものの 2 種類に大別される。そのうち後者の文字だけが印字されたものにはカラーバリエーションがある。このカラーバリエーションが 5 種類ある。もっとも多いのはブルーブラック（図 2）のもので 129 点、そのほか、ほぼ同一のデザインで水色 34 点、紫 31 点、黒紫 15 点、黒 1 点が確認できた（ちなみに MARUYA タイプは 4 点）。〈丸善 2〉は〈丸善 1〉 MARUYA タイプに酷似した赤色のもの（図 3）と、ブルーの地に金字で、英字だけが印字されたもの（図 4）の 2 種類がある。それぞれ 17 点、6 点確認できた。〈丸善 3〉は、〈丸善 2〉英字デザインに類似した紺地に金字デザインの二種類があり、英字と日本語が混在したもの（図 5）と英字のみのもの

---

<sup>3</sup> 丸善の大阪支店の開設は 1872（明治 4）年、京都支店の開設は 1872（明治 5）年、福岡支店の開設が 1913（大正 2）年である。

(図6)の2種類があり、それぞれ点数は78点、42点である。〈丸善4〉は1種類(図7)で、81点が確認できた。以上が、芥川の旧蔵書・洋書に確認できた丸善の書店票の全14種類である。(そのほか、当該書店票の上に別の書店票が貼られていて、詳細を確認できなかった2点がある。)



図1 丸善1 (MARUYA)



図2 丸善1 (ブルーブラック)



図3 丸善2 (赤)

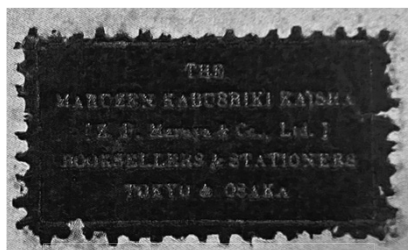


図4 丸善2 (英字)



図5 丸善3 (日本語・英字混在)



図6 丸善3 (英字のみ)



図7. 丸善4（グリーン）。

※図1～7の出典は、すべて日本近代  
文学館所蔵の芥川文庫の旧蔵書より<sup>4</sup>

丸善の書店票について、衣笠梅二郎「丸屋・丸善・書店票」（『學鐙』第40巻第10号、1936・10）では、

書物の表紙裏の片隅に貼附する、店名入の小さな貼紙即ち、書店票が、近年、小売書店にも古本屋にも相当に普及して来た。和製の書店票は丸善が元祖であつて、初期のものは横三糎、縦二糎位の白紙に朱色で印刷されてゐた。今は廃業したが、京都の大黒屋のも此れに類する。次で紫紺色の地に金文字で印刷したものに変わり、続いて草色の地に黒字で印刷したものが現れた。此れは何れも郵便切手の様にミシンで千切れる様になつてゐた。其れが又今日の様なものに変つたのである。屋号も亦 MARUYA から MARUZEN に變つてゐる。

---

<sup>4</sup> それぞれの出典は次の通り（請求記号のみ）。図1-A438、図2-A24、図3-58、図4-A64、図5-A15、図6-A59、図7-A6である。

と説明されている。この証言によれば、〈丸善1〉の **MARUYA** タイプが元祖であり（「初期のものは横三糎、縦二糎位の白紙に朱色で印刷」）、続いて〈丸善3〉が登場したようだ（「次で紫紺色の地に金文字で印刷したもの」）。その後、〈丸善4〉に変わったと考えられる（「続いて草色の地に黒字で印刷したもの」）。

丸善株式会社『丸善百年史：日本近代化のあゆみと共に』（上巻、丸善、1980・9）によれば、

書き添えて置きたいのは、書籍の表紙裏のトップに貼付されているラベル（書店票）についてである。このラベルは、その書籍を販売した書店名を表示しているために、蔵書家にとって是一種の記念品であり、また蒐集家にとっても蔵書票ほどの趣味はないが、若干の注意を惹くに足るものである。丸善ではヨーロッパの習慣を模倣して、このラベルを早くから使用し、またそのデザインも、前後によって若干の変化がある。現在八木佐吉の聚集の中には、**FROM Z. P. MARUYA & Co.** としたものが、四種ある。これらはいずれも明治十三年以前と見做すべきものであろう。そしてその意匠と朱色の印刷は、ロンドンのボーン製本所（**W. Bone & Son**）のラベルを、そのまま模倣したと思われる。〔中略〕

八木の蒐集品は、このほかに、なお大阪・福岡等の支店のものを含めて十数種ある。この由緒あるラベルがほぼ大正十二年の震災以後、昭和のはじめ頃から、書籍の販売量の増加に伴って、廃止されたのは已むをえないことながら惜しいことである。

とあり、やはり〈丸善1〉MARUYA タイプが最初期のものであり、その後いくつかのデザインの変遷を経て、丸善の書店票は、昭和初期には廃止していったようだ。残念ながら、どのラベルがどの時期に使用されていたか、現在までの調査では特定に至らなかった。

そのほか、芥川の旧蔵書・洋書に貼付があった書店票もあわせて報告する。すでに挙げた中西屋書店 59 点、教明社 11 点、郁文堂 9 点のほか、大黒屋（京都）、世界堂、南江堂がそれぞれ 4 点、Geiser & Gilbert が 3 点、機山閣書店、SHIROKIYA、Stratford & Green（ロサンジェルス）、The Time（ロンドン）がそれぞれ 2 点、一誠堂書店、川瀬日進堂書店（神戸）、南山堂書店、星書店（京都）、早稲田川鍋本店、BRENTANO'S（New York）、BUNKI-DO 古書店、BRENTANO'S、DAIDO BOOKSTORE、MAX NÖSSLER & Co.（横浜）がそれぞれ 1 点、確認できた。

これらの調査結果についてはいずれ、書き込みの有無等のそのほかの情報も含めて、各書籍と書店票を紐づけた形で一覧表の公表を検討したい。

※本稿は、JSPS 科研費 JP23K21913 および 24K03648 の助成を受けたものである。